

ちい 小さな 葉っぱの クリンクル

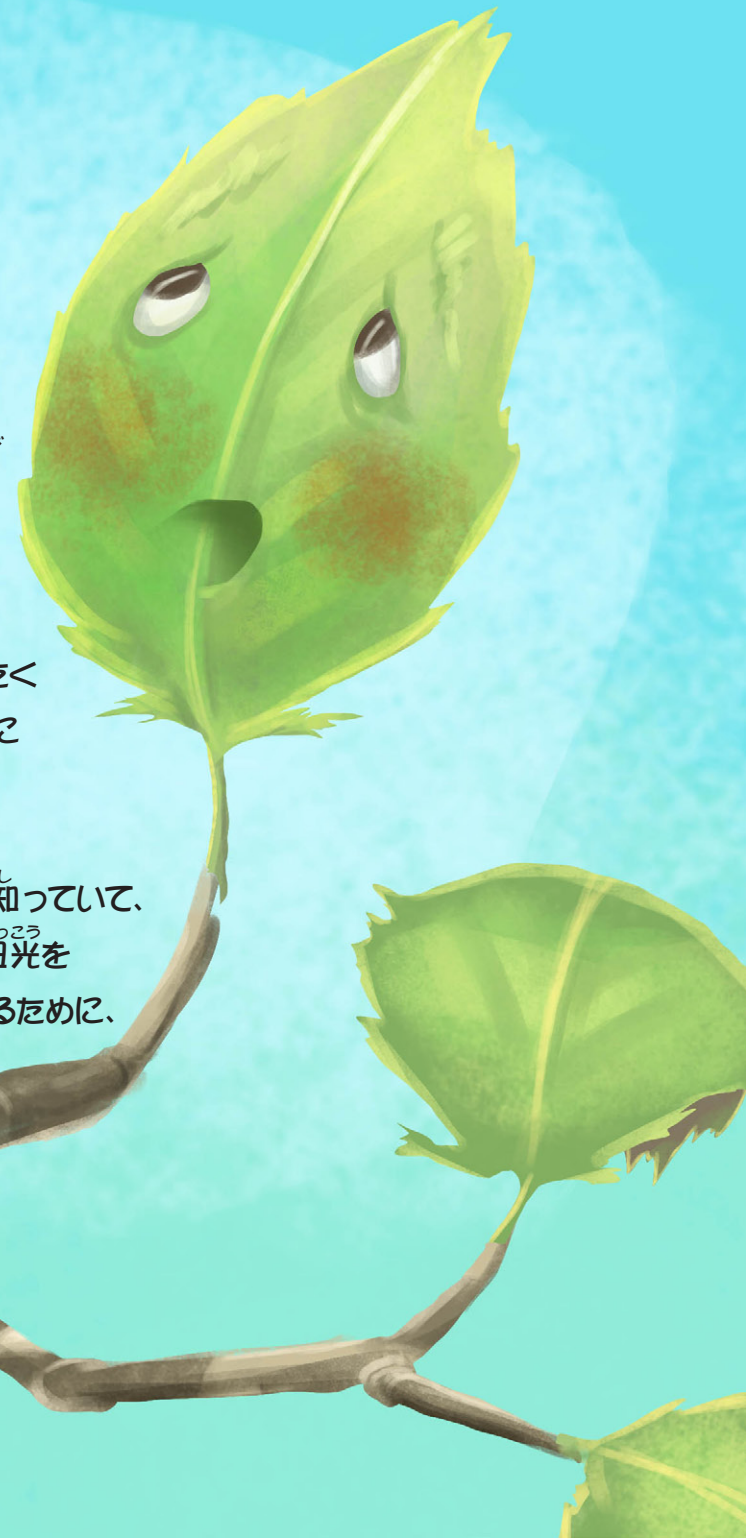
クリンクルは 悲しく なりました。どうしてですか？ 木の えだには とても たくさんの 葉っぱが ついていて、だれも 小さな クリンクルに 気付いて くれなからです。だれが 木の えだを 見上げても、 葉っぱは ものすごく たくさん あるので、クリンクルの ことなど 見えないでしょう。

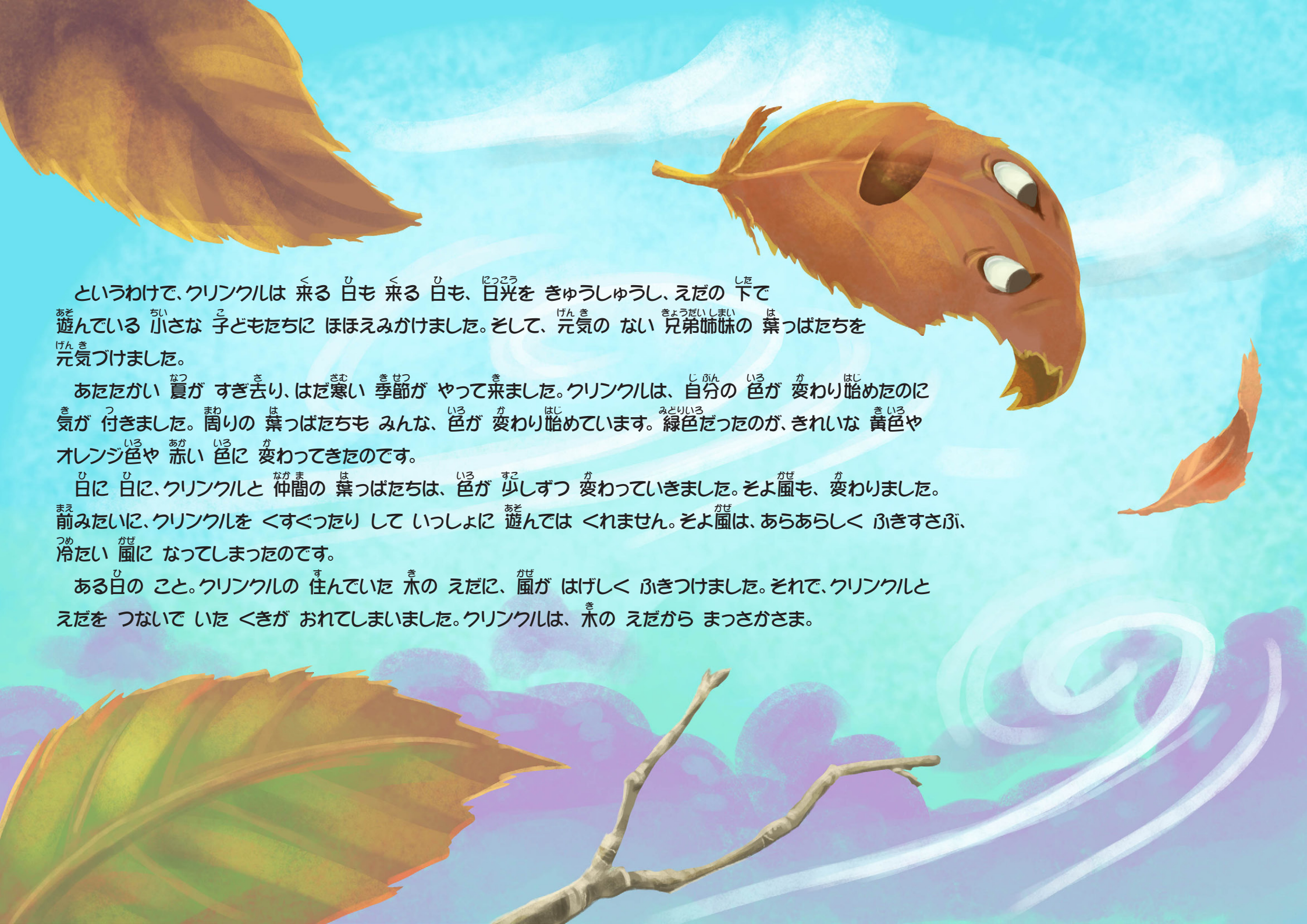
クリンクルは、そういった 悲しい ことばかり 考えながら、えだに しがみついていた。その時です。 あたたかい そよ風が 吹いてきて、クリンクルの 周りを ぐるぐると 回りました。クリンクルは くすぐったく なって、思わず クスクスと 笑いました。クリンクルは そよ風が 好きに なりました。そよ風は、そのように やさしく 吹いてきては、クリンクルを くすぐりました。

ある時、そよ風が 吹いてきた 時に、クリンクルを よび 声が しました。

「クリンクル。君の ことは、ちゃんと 見ているよ。わたしは、わたしの 小さな 葉っぱの 1枚1枚を 知っていて、 愛している。理由が あって、わたしは 君たちを つくつたんだよ。1枚1枚の 葉っぱには、木のために 日光を きゅうしゅうする という 役目があるんだ。それだけじゃ ない。君たちの 1枚1枚が、木を 美しく するために、 必要と されているんだ。」

クリンクルは、その 言葉を 聞いて うれしく なりました。





というわけで、クリンクルは 来る 日も 来る 日も、日光を きゅうしゅうし、えだの 下で
遊んでいる 小さな 子どもたちに ほほえみかけました。そして、元気の ない 兄弟姉妹の 葉っぱたちを
元気づけました。

あたたかい 夏が すぎ去り、はだ寒い 季節が やって来ました。クリンクルは、自分の 色が 変わり始めたのに
気が 付きました。周りの 葉っぱたちも みんな、色が 変わり始めています。緑色だったのが、きれいな 黄色や
オレンジ色や 赤い 色に 変わってきたのです。

日に 日に、クリンクルと 仲間の 葉っぱたちは、色が 少しずつ 変わっていきました。そよ風も、変わりました。
前みたいに、クリンクルを くすぐったり して いっしょに 遊んでは くれません。そよ風は、あらあらしく ぶきすさぶ、
冷たい 風に なってしまったのです。

ある日の こと。クリンクルの 住んでいた 木の えだに、風が はげしく ぶきつけました。それで、クリンクルと
えだを つないで いた くきが おれてしまいました。クリンクルは、木の えだから まっさかさま。



すると、^{かぜ}風が クリンクルをつかまえて ^{くうちゅう}空中に ^{ほう}放り上げました。
その後、クリンクルは ^おまた ^{はじ}落ち始めました。^{かぜ}風は、クリンクルと
いっしょに ^{あそ}遊んでいるかの ようです。クリンクルは、^し自分が ^{ぶん}どこに
行くのか ^わ分からず、おっかな ^いびっくりです。しばらく ^{あそ}すると、
クリンクルは ^{ちじょう}地上の ^{くさ}草の ^{うえ}上に ^{ちゃくち}ふんわりと ^{おそ}着地しました。

そこに ^{よこ}横たわった クリンクルは、^{そら}空を ^み見上げて ^{おも}思いました。
(大変だ！ ^{たいへん}ひとりぼっちで ^{ところ}こんな ^き所に ^{とこ}来てしまったなんて。

^{なかま}仲間の ^は葉っぱたちが ^きこいいいなあ。どうしたら ^いいいんだろう？
みんなと ^きはなれて、^き木からも ^ははなれちゃったよ。みんなの ^{ところ}いる ^{ところ}所に
もどけたらなあ。)

すると とつぜん、^き聞き覚えの ^{おほ}ある ^こ子どもの ^{こえ}声が ^きしました。クリンクルが
^{なんど}何度も ^{なんど}何度も ^きほほえみかけた ^こ子どもたちの ^{ひとり}一人です。その ^こ子は、クリンクルの
^きいた ^{した}木の ^{あそ}えだの ^{だい}下で ^す遊ぶのが ^{だい}大好きでした。「まあ、^み見て。^おきれいな ^は落ち葉よ。
これも ^も持って ^{かえ}帰ろうと。」と、^{おんな}女の ^こ子が ^い言いました。



(ほくを、どこに 持^もつてくつて?) そう 思^{おも}っていると、おんな こ 子は クリンクルを さつと 拾^{ひろ}い上げて、
ふくろの 中^{なか}に 入^いれました。その ふくろの 中^{なか}には、ほかの 葉^はっぱや 花^{はな}や 草^{くさ}や クローバーも 入^{はい}って
いました。

「やあ。ほく、クリンクル! 初^{はじ}めまして!」と、クリンクルは みんなに あいさつしました。

「こちらこそ。」と、みんなが いっせいに 言^いいました。そして、じこしょうかいを しました。

「ほくたちが これから どこに 行^いくのが、知^しってる?」と、クリンクルが たずねました。

すると、長^{なが}い 草^{くさ}の 葉^はが 答^{こた}えました。「ほく、最^{さい}初^{しよ}に おんな こ 子^こに 拾^{ひろ}われたんだけどね。何^{なに}か 特^{とく}別^{べつ}な
プロジェクトのために、ほくたちが 必^{ひつ}要^{よう}なんだって 言^いってた。」

「それって、何^{なん}なのかしら?」と、クローバーが 言^いいました。

その 日^ひの 午^ご後^ご、クリンクルと 新^{あたら}しい 友^{とも}だちは、小^{ちい}さな えだや ほうで 作^{つく}られた 巣^すの 中^{なか}に しかれました。



「わたしの ハムスターの フィガロが 病気^{びょうき}なの。カゴ^{そこ}の 底^{そこ}
固^{かた}い 所^{ところ}じゃ なくて、ねどこ^{ひつよう}が 必要^{ひつよう}なのよ。だから、かわいくて い心地^{こころ}の
いい 巣^すを 作^{つく}ってあげよう^{おも}と 思^{おも}って。」

ハムスターは、かわいそうに、とても つかれている 様子^{ようす}でした。でも、おんな ^こ子^こが
作^{つく}ってあげた やわらかい 巣^すの 中^{なか}で、まもなく いびきを かいて ね始め^{はじ}めました。
クリンクルと 仲間^{なかま}たちは、新しい 友^{とも}だちを みまも^{みまも}りながら、たがいに 顔^{かお}を みあ^{みあ}わせて、
ほほえみました。クリンクルは、心^{こころ}から うれしく 思^{おも}いました。自分^{じぶん}は ちっぽけな 葉^はっぱに
すぎないけれど、この おんな ^こ子^こを 喜^{よろこ}ばせ、ペットの ハムスターを 心地^{こころ}よく させてあげると いう、
役^{やく}目^めを 果^はたしたのですから。

きょうくん きみ ちい たいす
教訓^{きょうくん}：君^{きみ}は どんなに 小^{ちい}さくても、だれかの 助^{たす}けに なれるんだよ。

お
終^おわり